12　七宝寰宇無双図額

濤川惣助

一面

明治二十七年（一八九四）
無線七宝
四三・〇×七五・〇

濤川惣助の無線七宝は、七宝によって日本画の描写を徹底的に再現することを究極の目標としていた。これは並河靖之が《七宝四季花鳥図花瓶》（作品番号10）で試みた植線の肥痩で、日本画の筆意を再現しようとしたことにも当てはまる。だが、濤川の作品の大きな特徴は、花瓶などの器物だけでなく額装形式の平面作品を数多く制作したことであった。このことは結果として、絵画とは異なる七宝の独自性、つまり七宝である必然性を失うことにも繋がっていくのだが、それほど濤川の無線七宝の技術は絵画へと接近していたわけである。

本作品は、明治二十八年（一八九五）の第四回内国勧業博覧会に出品する予定で制作されたが、その前年、日清戦争に際して広島大本営に駐留中であった明治天皇へ献上されたため、出品されることはなかった。山頂付近が冠雪した夏季の富嶽図で、雪の下には青い山肌が筋条に表わされ、中腹を覆い隠すように雲が掛っている。山肌はその峻険さを表わすように濃淡の色の層を明確に分け立体感をもたせ、墨を滲ませた水墨画のような雲海は色の境界を暈かして周囲の大気に溶け込んでいる。左側の山の稜線は薄く掛った雲を透かして見ているように、上部の山肌の明瞭な青さではなく、うっすらと白く濁った青である。また、周囲の大気は、富士山を境にして上方は淡い薄紫色、下方は淡い薄鼠色に大きく分かれているが、両端へたなびく雲によって暈かされている。濤川は他にも額装形式の無線七宝富嶽図を制作しており、著名な大作としては一八九三年のシカゴ万博の出品作《七宝富嶽図額》（重要文化財、東京国立博物館所蔵）がある。この作品はシカゴ万博の絵画部門に出品され、アメリカでは絵画作品として高く評価され、濤川の念願を叶えたものであった。翌年に制作された本作品はその余勢を駆って、薄墨の滲みの様子などを加えることで、同じ主題をさらに飛躍させようとしている。

濤川惣助が到達した究極の無線七宝の表現を、墨の滲みのように表わされた富士にかかる雲に見ることができる。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

明治美術の一断面――研ぎ澄まされた技と美
三の丸尚蔵館展覧会図録No.82

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成三十年十一月三日発行

© 2018, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan